伽説七部集

伊藤聖

六

文研
911.308
H15
6

911.308
H15
6

中村(後)

[illegible]

荒野集巻之六

雜

年中行事内十二句

供屠蘇白散　荷今

いたけなやとそなかそ和る人は身

春月祭

としをにゑるたの春秋はしらず

石清水臨時祭

45-5106

沓音も志つのくかさすさみらふ

灌佛

こまぬれ月やついてこ浴ふ佛達

端午

おもこ穂ゝて蓑付こ浴髪こ浴

施茶

うちゆてなこ次茶そ虫臭き

乞巧費

早稲田大学大学院文学研究科図書

~~4714~~

ワの茶とゆ七夕草そ笑とき

駒迎

爪髪も猿のするやこ浴むへ

撰虫

そのの我ゆや足のおれてるさりしき

十月更衣

ましきれ衣かへとゆかりむ

五篇

舞姫に来ひ指をおくまかり

追難

おもひ絶てや脇よそつるく思ひ面

詩題十六句　野水

今日不知誰計會

春風春水一時來

氷ゐし深水淡々ゐ淡まちの風

白片落梅浮澗水

水ゐ結たしに付て淡梅白し

春來無伴閑遊少

花賣に留ることたのまるゝ隣少

花下忘帰因義景

寝入なはそのくしきせとなの下

留春春不留春歸人

寂寞

いまもこゝ絶へ淡の野ちるゝ風

嚴風吹袂衣　不寒復不熱

綠朧色松のはやさくれてゆく

池晩蓮芳謝

蓮のまもなくかれゆくを見てもまたそこは

暑月貧家何処有　客來唯贈北窓風

涼しきとて切ぬさまりにかのやと

大底四時心惣苦　就中断腸是秋天

雲の絃を紬るを見し　秋の空

夜來風雨後　秋気颯然新

秋のゆるき絃てしなく風もゆかし

遅々鐘漏初長夜　耿々星河欲曙天

思ひきをそひなき人もかはりてきかき

殘影燈宵糲斜　光月穿牖

[illegible]の月

一万物　秋霜能懐色

白[illegible]や[illegible]を秋の[illegible]

十月　江南天気好

可憐冬景似春美

こかしも[illegible]息つく小[illegible]

寂寞深村夜残ノ雪中[illegible]

[illegible]や[illegible]

白頭夜礼佛名経

佛[illegible]の礼に腰懐く白髪小

[illegible]ひのこ[illegible]

[illegible]くて

鋸鏑目立　舟泉

かき[illegible]の[illegible]

付木突

五月園の鶏てきれし人の家

鉤瓶縄打

かへるけやゐのこくとゐ秋の里

糊賣

あさまかのきれくれはむつくも

馬糞掻

こがらしの松まちまふかきと

つまきて

李夫人

魂在何許香煙引到焚處

かけ給ふの抱はきてゆのこころもなし

楊貴妃

雲鬟半偏新睡覺花

冠不整下堂

まちる風に帯ゆるこゝろ

昭陽人

越人

小頭鞋履窄衣裳青黛
黙眉々細長外人不見々應笑
ものあはれのやもしのまの絵なりけん

西施

宮中拾得娥眉斧不獻吾
君是愛君

芸なりけ植えてあらく杜丹の那

王照君

玉貌風沙勝畫圖
ちの木にもまさ絵ぬるの柳かな

一目留主をするるの僧さく

卯

寝やの蚊や法佛供養火をおこり

辰

杜若生ん絵書れ来るほか

巳

釣雪

[illegible]釋乃賤[illegible]

午

[illegible]

未

蟬乃[illegible]武家[illegible]多食[illegible]

申

五月雨也[illegible]

[illegible]生[illegible]

[illegible]

山猷

廉笛乃上手哉[illegible]樹水

野鳥

鴨突[illegible]児竹

星虫

枝[illegible]蜀漆加那　含呫

海奠

おぬしろせ鎩引きと盆の月　仝

川奠

杖の昏鶴川くの火ぬるとゝ　含咕

牛馬罟是謂天落馬首穿牟

鼻是謂人

一方ゑ梅はく桃は継木ゝ那　越人

藏舟於壑藏凶於澤謂之

周然而夜半有々力者負

之而走

かゝるゝ師走の市にうるさしい

絶聖棄知大盗乃止

七夕とおりすとともなきむし

鋭者矢

[illegible]　桂夕

鈍者壽

鶴江乃雪けしなるとあらはれ　市山

藤房

ほとゝきは鳴やむ時をしるとまり　一井

師直

うつくしく人まゝあらはれ　荊州　長虹

一休

[illegible]のかつらはかしや月の雲　湍水

法然

鳴あるゝ乃ほとゝきはうつくしき　嵐彈

凶岩

おくやゝらを散て減るゝ岩の角　湍水

海岩

苔とゝとし[illegible]　仝

曠野集巻之七

名所

いくまくのすみ奥さし見る海竜田ゆ　杜國

しし奥新骨や或ゆら大江山　荷今

かゝ橋乃松をたゝかと朧まく　芭蕉

芝泉一把うつくしかんる河波まゆ　湍水

嵯峨はくそそるあゆゑぬ盛　荷今

琵琶橋眺望

[illegible]残る鬼獄さむしよ孫まつ[illegible]　倉岾

宮[illegible]　宗祇 法師

美濃國[illegible]

[illegible]

芽野[illegible]布子[illegible]更衣　杜國

麦うつや[illegible]　童五

五月雨[illegible]橋　芭蕉

湖[illegible]　去來

牛もなし[illegible]　一髮

角四川[illegible]

いさのは[illegible]　貞室

みよしの[illegible]　破笠

いさらひも[illegible]　芭蕉

夕月や杖[illegible]角四川　越人

九月十三夜

[illegible]富士[illegible]　素堂

鴨寒にちるゝ風にうたるゝ柯田に　胡及
鴨寒に菅津のあるに結むまこに　剛支
武蔵野やいくあすしもえる時雨　舟泉
湖を風にうしろ人をん村しく純　尚白
かし嶺やさまるもあるせきく卯しく純　伊藤 随友
むさしの也れ母へとみるの日あしに　洗悪
生うしと生海鼠を燒や小の奥　俊似
みさ純の狩韓穂やをのくれく　津嶋 一笑

雪結富士芳菊屋一川さかく純ゆり　湍水
たし野山も唯大雪結夕小　野水
星嶺の雲出見ともや鳴ゆる　芭蕉
あるの日や不破の小道結媒ちひ　如行

旅

雲雀とり上にやまうの涼ゆ那　芭蕉
大和国草尾村にて
花の俗謂に似たる旅ゆ那　仝

橘咲星を眠るとく過ぎたり　夕机
日の入や舟こえて行桃のむ　一髮
のとらしや瀑の音も生さうな　荷兮
出れ脱て後こたひぬ衣こへ　芭蕉

ある人の餞別に

おとしき次なるたとへて笑ひ　除風
寝いらぬ食燒ゆ何やら明やも花　冬松
蚊をころすたらに出る様に　昌碧

五月雨や柱目をおす市祐家　松芳
夕ぎにとの天名ゟ一志ほ　傘下

芭蕉士を送る

稲妻にさしつきゐるなりの那　釣雪
なきくらく枝にすゐ秋の蟬　一井
あき風に中ゟ出るわの飛ぶ　野水
掛いさし出しきへ蜂のかなしさ　舟泉
雲ゟ出ぐすりこ松こえてぬる　嵐弾

ちらしなまいくまむかほく

文級乃月ちこ人まるくれ秋かり　荷今

越人旅をさるよし宮とて京を見ゆ　李

月にい腸れつきて馬乃うへ　野水

れくれ秋川れくりつきて本曾ち秋　芭蕉

懶乃鼻れ見も散い秋のいか　路通

狩聖桶といふ物其角れ[illegible]

れくれとして

狩聖桶に麻をかつきて秋の山　荷今

こゝかりく稲ちるを[illegible]　京　ちり

入月こゝ志はしいさまりか　去寮

能きけて鍛かく打碪か那　一井

小川まてくへまとうるくとて

澤菴乃墓をいの秋の雲　文鱗

草枕ちまきてれしかあるの夢　芭蕉

蔟あれぬ刀うこてや村しく秋　津嶌　常秀

鳴あまて芭蕉なく連ぬく

いく夜寒ふそ秋ほとほとろひも　荷兮

ちゝこそし羽織を絵に入るきり　鄞水

其角をわかるしさき

あくる川ゑ出とも半川なるゑの宿　荷兮

天然とくこの秋ゑまへ雪れ蓋　越人

うゝ庭のるにこてゆくかるゑ　傘下

星人のたりはうもしの雪　宗因

越人と吉田の澤まで

をとは秋と二人孫ねそこのりしき　芭蕉

旅ゑ疾しうくるしや浮世の煤拂　同

述懐

艸庵を捨てゐる時

きゆる時を氷もきえてもしるゝ也　路通

子を獨守りて田を打嬢のな　牧宣

余にの田を埴入ぬも浮巻うな　落梧

高野にて

愛宿にたゞめさ風ゆり奥の院　杜國

梅ちらくはあたりくるも食ふ　梅舌

高野にて

父母のしきりに恋しく雉子の色　芭蕉

あやめさきすがさくとそのついて小　荷兮

さうふ入湯をもらひ一盤　同

一なのなすひもあまる信濃の郡　杏雨

肩衣を底にしてゆるせきの夜　杉風

何もしや白髪にかつく麻木賣　亀洞

九月十日まふ堂の立しまて

かくれあやとゆく草の中に残る菊　嵐雪

この里にあるまさくの頃穂の郡　暁語

人のいなりをうらしく

さ紙をうしあ紙に記せしの裏社書　芭蕉

旧星の人に云はのもあ

こかしの落葉やふるふゆひ　杜國

鎌倉建長寺まふてく

落ちかく多ち津ふれたるちやな　越人

ある人のかとくりしとやとし

落葉をも一筋たくらぬく

あまぬ神なほ落葉ふる煙やうさくり　荷兮

たつのくりしりあるゝ雙すり

出しらちの腹甫や次ん鐘の夢　氣彈

榾の火すり親子足さす俺れ作　去來

月や遠く耳やちのくるとしのくれ　西武

ぬるさとや膳の時ふ泥年姑蕃　芭蕉

けあしのるしをたもふ舟のくれ　除風

老とまさまして贅先ふおもふ

行年や親に志らうをかくしけり　越人

恋

春の野にかあるくのまふ血ふ　伊勢　一有妻

きぬ〳〵や余のことゝ時なる　除風
蚊屋おとく寝のおもてこるなり那　長虹
むしテ乃月にこそ秋ぬるつゝ　丈涸
虫テに小袖ゑつゝる女ゟ那　冬文
さくひめし妹ゟ垣ほとゝ蕉ほり　心棘

六宮粉黛無顔色

青月周の稲妻消ぬ也月の那　長虹
一ゑく見人侍のぬ所をとりゟ那　尚白

さひしきを形に

つきかしき遠るやく神ゝ女ゟ也　荷兮
志ゑるのゝ侍に明る つまとの家　小春
妻の兄弟あらそこし給へ神送り　越人
松の中時ゑて旅のとゝゆりに　俊似
抱おもひ火燵を明ているむ　舟泉
うゝねて火燵消てるなり神に　嵐雪
山畑ありものゝ心ゝや華ゝ引　松芳

こさぬしをも数見えたとて屋りけり　冬松

れそろしやさぬしの法御敷き　昌碧

無常

未期に

菱ゐ花をも高堂の阿彌陀仏処や　守武

世事迅速

咲つ菱ゐ花ゐ花なるまをしも此島ゐ　傘下

未期に

菊世や空出てみ明乃ほとゝきは　堺　兄順

松坂の浮飄とゆ人の多きかり

ゐるもしいひやすもなる

橘乃ほとゝ郭えぬきりゆし　荷今

いまとの迷ゐ

もの人にかなしく潜る室のな　京　去來

ある人ゐらしなり此ゐる時にもて

あたむの小氏とこゆるちきりゐれ　荷今

世をもやく妻の身はかりなる此

水無月の相のつゝ無心に只ゆへし　野水

辞世

あも純や灯籠一川に主　コ舟

子こをゝ純なる此

仰て都のあらもかゝらん一躍り　落梧

一原野にて

をゝくなの也小町かなしのたるさし　釣雪

妻の追善より

をゝくなへしもその星人の純さのむ　自悦

季下の妻乃ゝまかりしを

いふゝて

孫の純すやかへひえゆく小はし　去来

コ舟　身まかりし後

その人もち鼾さくれし秋のゝ純　其角

母ゝなる子も無純を

おさ風子やぬきり合ひに秋の香　尚白

ある人の追善に

埋火もきゆやなみだの烹るこゑ　芭蕉

旅にてみまうりまゐ人を

あハ雪ふきてうぬこうちに消えぬり　嵐彈

そまつ迄野くさやしき佛の名に有　加賀 小春

曠野集巻之八

釋教

伊勢にて

神垣やおもはもうけれ涅槃塚　芭蕉

負ひ来る母おほしまりおもんそう　嵐彈

西行上人五百歳忌に

まりきゆしまゐ御ゐる梅の風　荷今

おほし遠忌に

連翹也 [illegible] 月也 志[illegible] 胡及
うゝ青 [illegible] の巣 [illegible] 二王 松芳
木履 [illegible] 雨乃花 杜國
[illegible] 冬松
花 [illegible] 俺ん 塔 [illegible] 其角

貞享つゝ此へ辰の歳孫生月東照宮の別當
僧正の法房に慈恩大師 近座 執事法華
八講の [illegible] 聽聞 [illegible]
序品の [illegible]

散 [illegible] 越人

女 [illegible] 房の聽 [illegible]

あるゝ龍女成佛の所 [illegible] 志のひあへ
白梟かむ声の [illegible]

[illegible] 同
親 [illegible] 尾上のさゝ [illegible] 俊似
古寺 [illegible] 草 一井

八 [illegible]

[illegible] 千圃 伊豫
[illegible] 紅杜丹 一井
夏山 [illegible] 江湖 [illegible] 芭葉

[illegible]

灌佛乃日に生絶[illegible]麻の子ゟ　芭蕉

灌佛の[illegible]此清し[illegible]　尚白

[illegible]

腰のあゝき礼義たゞ[illegible]山ゟ　一雪

[illegible]て菴一日の清[illegible]ゟ　加賀　一笑

十如是

[illegible]　荷兮

昂身昂佛

隻陰乃[illegible]たゞんの佛ゟ　愚益

ほころひや僧の縫[illegible]衣　鼠彈

[illegible]施餓鬼棚　荷兮

[illegible]　探丸

石籠に[illegible]鬼の棚のくつまゝ　文里

魂祭舟[illegible]向きり　亀洞

[illegible]　卜枝

桜待れしらんこてん松乃張　釣雪

平ホ施一切

桜待こゑく行人を我とし先なり　後似

稲妻りし大佛たのむ御弟子　荷兮

恒越こ引導敬くもせ我小　卜枝

ある人四時の景物なりとて水鶏を
鶏とを不食不圓を人を感しく
系も居をとくとす
居くもぬ人佛こなりハぬり　荷兮

あるまの無けに

燕も清寺乃鼓久しくて　其角

進こおくく垣主たりしや月の舟　一井

我の子こ本郷をとくる法師小　卜枝

人のもとにあるとてこちおむとし
ゆるこまくまくれはまを

衣黒くくみを所しなり一時雨　嵐弾

鎌倉の西国論寺にて

たくとさの濱や直こ水るるん　越人

吉寺の雪

曙や伽藍〳〵の雪見廻ひ　荷今

同

雪ぬやうる二王ゆら片腕　後似

つくりゐるくこハされもきし雪仏　一井

能寝する人のさハ夢や秋鼓　文淘

千観ゟ馬もかせりしものゝ秋　其角

藥王品七句

如寒者得火

まつり白くむかしの焼くつゝあるゝ　胡及

如裸者得衣

雪乃日内海橋指ふあまれ家

如商人得主

双六乃あひてよひこむついまゝ

如子得母

行ゐてくをけそ丸つくさけの風

如渡得舩

月は比隣の板木さまたなり

如病得醫

かたくとき清れる付添山なるに

如暗得燈

秋のよやわひゆるときに起さる

神祇

古きやかさるの柳子頭　釣雪

二月廿五月本納て

おさらきや廿四日の月は梅　荷今

しんしと梅ぬうる庵火ぶ　同

学るとあひてことし神の梅　亀洞

上下のさりらぬやうに神の梅　昌碧

灯のかすしのなりまり梅の中　釣雪

何とやらむ梅のむ　越人
見えし明くあらぬそ　舟泉
月代も志るなとや　梅の家　雨桐
門あらて梅さへ瑞籬たるみなり　重五
鶴馬ゆゑ海人の段はさしらぬ　玄察
花に来て歯朶かさ見る社に　鈍可
宮乃後川後見えるさしらぬ　李桃
此手波の木の梨の中の蟲に　好葉

はとゝきに鶴の中を通りより　玄察
哀なる鶴の灯をわくる夜串かな　亀洞
破扇つ交にあらす清稜の頭　未学
川原を庵まさ絶て此稜に　荷今
こかしや星の子覗く神輿の風　尚白
此月の恵比須そこらにゐますに　松芳
みさ絶や称宜のさしらる油筒　落梧

若宮奉納

さて志ゝ也ゝ家も妙也神々不　利重
跡の方也寝ありすゝ我の神不ゝ　野水
鈴鹿川若明の旅ゝ神不ゝ　昌碧
かつらきの神とあてふとき庭火ゝ　村俊
橋杭や此稜かゝる媒ちらひ　卜枝

祝

肩付きていくよりなり也其ゝ　冬文

荷竿ゝ四十乃まちて

幾年も竹を作りてゆるゝ　重五
君ゝ代やとゝくことゝ玉つき紀　越人
青苔ゝ何處もと神の石　傘下
いさゝる海ゝ其土に枝ゝのん　亀洞
子代の秋にあひて志るしゝ　同

志るしかゝ神ゝ人ゝ事ゝ

先祖へ梅代ゝの多ゝ紀里　芭蕉